研究ノート

質的データを用いたソーシャルワーク研究に関する一考察（その１）

髙　木　健　志
Takeshi TAKAKI

近年、ソーシャルワークにおける調査研究においては、様々な手法を用いた調査や分析技法が用いられている。このことは、ソーシャルワークにおける実践と理論との乖離という課題を克服し、ソーシャルワークの深化のための、いわば車の両輪としての実践と調査研究へと着実に結びついていっているといえるのではないだろうか。

本稿では、近年のソーシャルワーク研究のなかでも、筆者の関心領域である精神保健福祉の領域に関するグラウンデッド・セオリー・アプローチ（Grounded Theory Approach、以下GTAとする）やM-GTAを用いたソーシャルワーク領域の先行研究のレビューを行った。さらに、筆者が関心を寄せている修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach、以下M-GTAとする）について、木下の著書（木下：1999、2003、2007）をもとに要約しながら整理した。

キーワード　質的データ、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ、ソーシャルワーク研究

はじめに

近年、ソーシャルワークにおける調査研究においては、様々な手法を用いた調査や分析技法が用いられている。このことは、ソーシャルワークにおける実践と理論との乖離という課題を克服し、ソーシャルワークの深化のための、いわば車の両輪としての実践と調査研究へと着実に結びついていっているといえるのではないだろうか。

筆者は、拙稿においてソーシャルワークの研究方法として、実証主義的パラダイムに基づいた数量的方法をはじめ、多くの研究方法があることの整理を行った（髙木：2010）。その際に得られた考察として、なかでも質的研究には、先の「実践と理論の乖離」を乗り越えた、これからの実践と理論化とのあり方の発展的可能性が期待されることがある。

質的データには、インタビューによって得られるデータや、記録物、参与観察などの観察によって得られるデータなどがある。そして、得られたデータの分析の方法としての質的研究方法には、エスノグラフィー、口述史研究、グラウンデッド・セオリー・アプローチ、ケーススタディなどがある（髙木2009：75）。ソーシャルワーク研究においても、グラウンデッド・セオリー・アプローチに関する研究（深谷・大瀧 1995a:1995b、南 1996）や、ナラティブ・アプローチに関する研究（横山 2004）、またエスノメソドロジーを用いた研究（藤田 2009）、ライフヒストリーを用いた研究（三毛 2009）、主に参与観察を用いてデータ収集が行われた研究（村杜 2005、石山 2010）など様々な先行研究がある。

筆者は現在、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Grounded Theory Approach以下、GTAとする）のなかでも、木下（1999、2003、2007）によって提唱された修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach、以下M-GTAとする）について関心を持っている。そこで、本稿では、M-GTAについ

ての理解を深めることを目的にデータから分析を始めるところまでを検討した。

Ⅰ．GTAやM-GTAを用いたソーシャルワーク領域における先行研究について

ソーシャルワーク実践を対象としたGTAを用いた研究としては、大瀧（1995）が、精神科医療機関に勤務するPSWの退院援助過程に焦点を当てた研究を行っている。この研究では、精神科病院に勤務するPSWが、どのような援助過程を体験し提供する援助を決定していくかという過程が質的研究方法の一つであるGTAを用いて分析されている。長期入院患者の退院援助に関わる過程において、特にデイケアや作業所などの資源の提供に際して、援助関係が複雑なプロセスを経て展開されていくことが示唆されている。

ソーシャルワーク領域におけるM-GTAに関する論文は、方法としてのM-GTAに関する先行研究（三毛 2002、坂本 2008）、実践者や当事者を調査協力者もしくは調査対象とした研究（三毛 2005、長崎 2010、住友2007、横山2008）などがある。

医療ソーシャルワーク領域における先行研究としては、三毛（2005）によるM-GTAを用いた大学病院に勤務する熟練ソーシャルワーカーを調査協力者とした研究や、てんかん相談における医療ソーシャルワーカーに関する眞砂（2010）による研究などがある。児童福祉領域では、山野（2010）による市町村の職員を調査対象とした虐待防止に関する研究があり、また家族福祉に関連する研究では得津（2010）による研究がある。

なかでも、筆者の関心領域である精神保健福祉におけるM-GTAを用いた研究には、ソーシャルワーカーを調査協力者とした研究（住友2007、横山2008）や、当事者を調査協力者とした研究（長崎 2010）がある。

住友（2007）は、先行研究の検討から地域生活支援センターの担う役割や機能については多大な期待が寄せられていることを整理された上で、地域生活支援センターに所属する５年以上の精神保健福祉業務経験を有するPSW12人のデータに基づき、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を用いた分析が行われている。その結果、《地域生活を可能にする直接援助》と《サポートシステム構築志向》という２つのコアカテゴリーが導き出され、利用者との関係性を構築しながら、成長していくPSWが地域を自らの実践活動に位置づけていくプロセスがあることが明らかにされている。

横山（2008）は、医療機関に勤務するPSWが現場での困難や葛藤を経験してどのように価値的態度が結晶化されていくのかに着目し、一定の経験を有するPSW14人を対象にインタビューを実施している。M-GTAによる分析の結果、①精神医療の現場で経験される態度形成のプロセスは、【あるべきPSW像への自己一体化】から【限界から始まる主体的再構成】を経て、【互いの当事者性にコミットする】に至り、【経験の深化サイクル】が形成され、②態度形成上重要なプロセス【限界から始まる主体的再構成】では、PSWとしての「救世的使命感」に基づく自己効力感が崩壊するという「疲弊体験」が重要契機となり、「一時離脱」と「自己への問いかけ」という２つが機能することで［PSWとしてのコア形成］に向かうことが明らかになり、③PSWの経験とは、援助・支援という契機を通して、利用者と自己（PSW）がそれぞれ自分らしさを生活のなかに見いだすというパラレルな経験であること、を明らかにしている。

長崎（2010）は、当事者へのインタビューを行い、M-GTAを用いて分析を行った。この結果、特に当事者の求めるサポートを提供することが難しければ、様々なソーシャルサポートも利用者に利用されないようになるということを明らかにしている。なかでも【サポートの実質化】と【関係の中で支えられる】関係を意識した上で、ソーシャルワーク実践していくことがソーシャルワーカーに期待されるという点は重要な示唆であるといえよう。

坂本（2008）は、エビデンスの重要性と特質を

論じていくにあたって、精神保健福祉領域での実際の研究を例示しながら、M-GTAの可能性を論じている。

このように、ソーシャルワーク領域、特に精神保健福祉の領域において、M-GTAを用いた研究は少しずつ蓄積されてきており、かつ、今後もそれを用いた研究は期待されているといえよう。

Ⅱ．GTA、なかでもM-GTAについて

１．GTAの類型について

GTAは、その生みの親であるアメリカ・シカゴ大学看護学部の教員として在籍していたグレイザーとストラウスによって産み出された（Glaser&Strauss 1965=1988、1967＝1996）。さらにこの２人は看護教育研究に携わっていたことから、看護領域で用いられるようになっていった。わが国でも、当初看護の研究領域で紹介され（木下 1990）、その後M-GTAは、看護領域で用いられていくこととなった（萱間 1995、都築 2004）。

GTAには、論者によって、４つに類型することが可能であるという意見（三毛 2002:21）や、５つに整理可能であるとする意見（林 2009:56、山野 2010:80）、さらにこの５つの整理のうち、５つ目の類型として、戈木版（2005）を挙げる論者（林 2009:56）とチャーマッツを挙げる論者（山野 2010:80）とがある。どのような類型化があるのかということを論じることが本稿での目的ではないが、GTAは、認識論や細やかな点において相違点があることから、GTAを用いて研究を行いたいと考える場合には、どのGTAを用いて研究を進めていくのかということについて理解しておく必要があると言えよう。本稿では、山野（2010:80）による整理を参照した（表１）。

２．GTAの分析特性について

まずGTAについては、いくつかの類型があることが明らかとなった。しかし、これらのGTAについては、ある一定の共通した特性がある。それが、５つの理論特性と４つの内容特性（木下 2003:225-34）である。さらに、木下は、①データに密着した分析から独自の理論を生成する質的研究法、②分析においてはⅠ．オープン・コーディングと（軸足・）選択的コーディング、Ⅱ．基軸となる継続的比較分析、Ⅲ．その機能面である理論的サンプリング、Ⅳ．分析の終了を判断する基準としての理論的飽和化、といったこれらが全て揃って初めてグラウンデッド･セオリー･アプローチと呼ぶことができる（木下2003：44）、としていることからも、これらの理解はGTAの理解にとって不可欠である。

グラウンデッド・セオリーの主要な特性には、①グラウンデッド・セオリーとはデータに密着した分析から独自の説明概念をつくって、それらによって統合的に構成された説明力にすぐれた理論である、②継続的比較分析法による質的データを用いた研究で生成された理論である、③人間と人間の直接的なやりとり、すなわち社会的相互作用に関係し、人間行動の説明と予測に有効であって、同時に、研究者によってその意義が明確に確認されている研究テーマによって限定された範囲内における説明力にすぐれた理論である、④人間の行動、なかんずく他者との相互作用の変化を説明できる、言わば動態的説明理論である、⑤実践的活用を促す理論である、という５つの理論特性がある。

そして、グラウンデッド・セオリーの内容特性として①現実との適合性（fitness）：研究対象とする具体的領域や場面における日常的現実に可能な限り当てはまらなくてはならないということ、②理解しやすさ（understanding）：研究対象の領域に関心をもったり、その領域や場面に日常的にいる人々にとって、提示された理論は理解しやすいものでなくてはならないということ、③一般性（generality）：提示された理論にはそうした（日常的な状況は常に変化していること）多様性に対応できるだけの一般性が求められていること、④コントロール（control）：グラウンデッド・セオリー理解した人々が具体的領域において自ら主体的に変化に対応したり、ときには変化を引き起こしていけるように、社会的相互作用やその状況をコントロールできなくてはならない、という４項

表1　グラウンデッド・セオリー・アプローチについて

	オリジナル版	ストラウス・コービン版	グレーザー版	修正版	社会構成主義版
発行年	1967年	1990年	1992年	1999年	2006年
提唱者	グレーザーとストラウス	ストラウスとコービン	グレーザー	木下康仁	チャーマッツ
出版物	『The Discovery of Grounded Theory（データ対話型理論の発見）』（Glaser&Strauss,1967）	『Basics of Qualitative Research:Grounded Theory Procedures and Technique（質的研究の基礎）』（Strauss&Corbin 1990;1998）	『Basics of GroundedTheory Analysis:Emergence vs.Forcing』（Glaser,B 1992）『Teoretical Sensivity』（Glaser,B 1978）	『グラウンデッド・セオリー・アプローチ』（木下1999）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』（木下2003）『ライブ講義M-GTA』（木下2007）	『Constructing Grounded Theory A Practical Guide Through Qualitative Analysis（グラウンデッド・セオリーの構築）』（Charmaz,K 2006）
認識論	あいまい。理論生成への志向性、grounded-on-dataの原則、経験的実証性、意味の深い解釈、応用が検証という立場。	ストラウスはシンボリック相互作用論の立場であるが、この本では認識論が不明確。ポスト実証主義。	グレーザーは数量的研究の訓練を受けてきた実証主義。grounded-on-dataの立場。	シンボリック相互作用論に基づき、プラグマティズム。しかし、grounded on dateの立場、データとの関係は客観主義。研究は現実世界との関係で位置づけられな、研究者が独立した存在であり得ない（データ収集、応用のインタラクティブ）が、データは外在的に設定する（抽象的に設定した分析焦点者とのインタラクティブ）立場。3つのレベル、特に応用のインタラクティブを独自主張。	構成主義。シンボリック相互作用論、プラグマティズムの基盤に立ちながら、現実を構成することを認めた解釈的分析を主張。研究対象者も意味や行為を解釈する。データと分析双方ともに、その産出に伴うものを反映した社会構成物であるとする。
分析方法	明示的なコード化と分析的な手続きを用いるとされているが、方法として明確ではない。	データの切片化（当該箇所の意味の多角的解釈）→解釈は密度のばらつきあり。オープンコーディング、軸足コーディング、選択コーディング。条件マトリックスの導入。	一言一行ごとにばらばらにするデータの切片化（数量的方法と同じ厳密さを意識）→解釈は同密度。理論的コーディングを助長するコーディングファミリーの導入。	切片化せず、データのまとまりを理解する。研究する人間重視。分析ワークシートの使用。Glaserのデータ重視し論理的検討を行うオープン化、Straussの深い解釈重視の分析テーマ、分析焦点者設定。	行ごと、一言一句のコード化。コード化は、研究対象と同じ視点を共有しているという思い込みを防ぎ、対象者独自の自分の現実の見方に順応していく。調査者は調査対象者との相互作用を通してデータ収集とその分析を行う。
理論的飽和化	あるカテゴリーに関連のあるデータにいろいろあたってみても、そのカテゴリーの諸特性をそれ以上発展させることができない状態。	①あるカテゴリーに関して重要なデータがもう現れてこない。②カテゴリーが特性と次元という点で十分発展している。③カテゴリー間関係が十分に精緻化され妥当性が確認された状態。	コアカテゴリーを構成する諸カテゴリーがすべて網羅され、発見されるべき新たなカテゴリーがない状態。	方法論的限定（①研究テーマを分析テーマに絞り込み、②分析結果の完成度を判断、③分析に用いるデータの範囲を設定する）の考えを導入し、合わせて判断。	新しいデータを収集しても、もはや新しい論理的な洞察のひらめきがなく、また中核となる理論的なカテゴリーの新しい特性も明らかにされないとき。

山野（2010：80）より引用

目がある。

Ⅲ．M-GTAについての理解

では、ここから、木下によるM-GTAに関する文献（木下 1999、2003）を基に、調査によって得られた質的データの分析までについての理解を進めていきたい。

3-1．修正版M-GTAの概要

修正版の主要特性として、次の７点が挙げられている（木下2003：44）。

①理論特性５項目と内容特性４項目を満たすこと。

②データの切片化をしない。

③データの範囲、分析テーマの設定、理論的飽和化の判断において方法論的限定を行うことで、分析過程を制御する。

④データに密着した（grounded on data）分析をするためのコーディング法を独自に開発した。

⑤【研究する人間】の視点を重視する。

⑥面接型調査に有効に活用できる。

⑦解釈の多重的同時並行性を特徴とする。

このうち、②、④、⑦についての理解が重要となってくる。

まず、②データの切片化をしない、ということについてである。これは、オリジナル版、グレーザー版、ストラウス・コービン版はともにデータの切片化を分析の要においたコーディングを説いている一方で、オリジナル版はその実際を明示していないということがあり、また、グレーザー版は、理論的説明は明快だが、実際にデータをどのようにコーディングするのかを示してはいないこと。さらに、ストラウス・コービン版はストラウスにより解釈の重要性は強調されているが、切片化の方法論上の意味が踏まえられているとは思えない（木下 2003：44）ということから、木下はそれに代わるデータの分析法を、独自のコーディング方法と【研究する人間】の視点とを組み合わせることで、手順として明示している。

次に、④データに密着した（grounded on data）分析をするためのコーディング法を独自に開発されたのだが、概念を分析の最少単位とし、グレーザー的特性である作業としての厳密なコーディングとストラウス的特性である深い解釈を同時成立させるために、分析ワークシートを作成して分析を進めることとなる。

⑦解釈の多重的同時並行性を特徴とするのだが、分析作業を段階分けせずに、例えば、データの解釈から概念を生成するときに、類似例や対極例を検討するだけでなく、同時に、その概念と関係するであろう未生成の他の概念をも検討し、推測的、包括的思考の同時並行により理論的サンプリングと継続的比較分析を実行しやすくしているということである。

次に、分析上最も重要な要点として、次の３点が挙げられている（木下 2007:100-113）。

まず、M-GTAにおける分析とは、データのコーディングと深い解釈とを一体で行うこと、である。修正版の分析上の特徴として、Ⅰ。システマティックな【コーディング】と【深い解釈】という性格の異なる作業を同時に行う。Ⅱ。初心者であってもデータとどのように向かい合ったらよいのか、つまりデータに対しての分析者の姿勢や角度を意識的に確認しながら進められる、という点がある。

次に、分析に当たっては理論を生成することよりもgrounded on data 、つまりデータに密着していることが優位である。つまり、分析上の優先順位は、①データに基づいた分析であること、②そうした分析の結果としてまとまるのが独自の理論であること、ということである。このなかで、データと概念の関係における原則については、第一原則として、「grounded on dataの分析（データに密着した分析とは、継続的比較分析、すなわち理論的サンプリングによりシステマティックに収集されたデータに関するデータについてのみ、有効となること）」、第二原則として、「生データよりもそこから生成した概念の方が優位であること」とがある。そして、分析結果は生成した概念と、概念間の関係であるカテゴリー、および、そ

の相互の関係、そして、概念の意味するところを具体的に示すためにデータの例示部分だけによって表現することとなる。

筆者は現在、面接型調査から得られたデータを、M-GTAを用いて分析を行っているところである。初学者である筆者にとっては、このgrounded-on-dateであるということの指し示す意味を理解するには、スーパーバイズを受ける環境と、かなりの時間・労力とが必要であることを体験をもって知ることができた。

3-2. データの範囲と収集法から分析ワークシート作成までの分析の手順

M-GTAのデータの範囲と収集法については次のようにすすめていくこととなる（木下 2007:160-173）。M-GTAは特に、面接型調査を前提に考えられている。そして、方法論的限定という考え方の発動に関する３点として、①研究テーマを分析テーマに絞り込む時、②分析結果の完成度を判断するとき、③分析に用いるデータの範囲を設定する時、とされる。このうち、「③データの範囲に関する方法論的限定」については、次のように述べられている。①最初の面接対象者の選定を重視する。現実的諸条件を考慮し、基準を設定して最初の段階における“集団として”の面接対象者を決めることとなる。データ収集に入る前に、対象者の研究目的上および現実的限定を明確に設定しておかなければならないということが挙げられている。

分析ワークシート作成までに、どのようにして分析は進められていくのか。

まず、分析は、ベース・データに対して行っていくこととなる。それは、①対象を限定する作業を意識的に行うのであるが、限定といっても明らかに異なる対象者を分けるのではなく類似性のある、あるいは関連性の高い微妙な違いを基準に、対象者と非対象者をはっきり分けるということである。また、何人くらいの面接データがあれば、一応ベース・データとなるのかという問題については、だいたいの目処としては10例から20例位（木下 2003:125）であることと示されている。しかし、この点については、実際の研究によって変わってくるものであろう。

M-GTAにおける面接型調査の具体的手順については、次のようになっている。

ベース・データでは、当然同じ面接を行なうこととなる。通常は自分自身の経験したことについてのインタビューとなるから、自然な形で話しやすいものである。注意点としては、ただ単に話しやすいように話してもらうのではなく、その内容が一般論的だったり伝聞だったりではなく、その人自身についてであることが重要である。ただ、筆者の調査の印象では、これだけで調査はできるものではなく、これまでの調査面接でのポイントを押さえた上で、さらに、以上の要点を加味してインタビューに臨まなければならないといえるのではないだろうか。もちろん、これは力量のない未熟な筆者の反省である。

面接型調査については、今後筆者の体験を含めて、改めて考察をしていきたいと考えている。

さて、面接型調査は事前の許可を得て録音し、のちに文字化し、また面接後は、速やかに、遅くともその日のうちに記録をまとめることとなる。このときにまとめる内容は、相手の話の抑揚、表情の変化、質問から返答までの時間などがあり、いわゆるフィールド・ノーツなどと言われるものである。そして、分析はベースデータの全部が準備できてから開始するのではなく、逐語化できたものから始めて構わないということが特徴としてあげられよう。

また、M-GTAでは、研究テーマに対して分析テーマを設定する。この中でも、特に、分析テーマの設定で重要なことは、データ収集後に行うことが挙げられる。これは、分析テーマを設定することによりデータに対してどのような“角度”で分析に入るかを定めることで、自分とデータとの分析的な距離がハッキリすることとなり、それは、自分が明らかにしようとしている問題がどのような動きをもった現象であるのか、分析の方向性が確認できるということまでが設計されているので

ある。そして、分析テーマの設定には、最初は「～プロセスの研究」というようにプロセスの文字をわざわざ入れて考えてみることが挙げられており、そうすることで自分が明らかにするのは研究テーマとして意義が確認された問題についての“うごき（変化・プロセス）”であることをはっきりさせることにつながっていくこととなる。

3-3. M-GTAのコーディング特性と概念生成まで

M-GTAのコーディング特性と概念生成までについてみていくこととする（木下 2007:174-208）。

M-GTAのコーディング特性として、①データと概念の距離はすべて一定とすること。②データとその解釈から生成した概念とを【研究する人間】をはさんで非連続化する。分離する。③データと概念の距離は一定かつ直接的であるが、そうして生成された概念はバラツキが生ずるということがある。

このうち、修正版でのオープン・コーディングとはとくに分析テーマと分析焦点者によって制御されたオープン化であり、それゆえ深い解釈をしやすくなっている。修正版でのオープン化の意味は、データの着目した個所に関して分析焦点者からみたときの解釈の可能性をできるだけ多角的に検討しそれをデータで確認していくことである。

次に、最初の概念生成が最も重要であることは、繰り返し説明されている。概念ができれば推測的、包括的思考の同時並行化を含め、それを基本モデルに分析を進められるから。最初の概念生成においては手順の確認や分析テーマの確認といった、そのこと自体だけでなく分析に当たってデータと向かい合う角度の設定と一緒の作業となることが多く、分析の緻密さ、解釈の深さがだいたい決まっていくとされている。ここで重視されるのは、解釈内容に対するリアリティ感や手ごたえである。このリアリティ感のカギは、解釈のオープン化にあり、深い解釈を試みることが必要となってくるとされている。さらに、これは、最初の分析をデータに向かい合う者自身にとってあいまいなまま済ませないことが重要であるとされている。

そして、データからの概念化の方法として、データと概念化との関係について、次の点が挙げられている。

まず、M-GTAではデータから直接概念の生成を試みることとなるが、いきなり概念そのものを考えるのではなく、データの中で着目した部分の意味を考え、それを適切に表現する言葉は何かという順序で検討することである。

そして、抽象的概念の生成ではなく、in-vivo概念を先に検討することも検討してよいとされている。また、概念はある断面を捉えたものであるから、そのとらえ方はできるだけ動的であった方が良く、生成する概念はあまり一般的過ぎないように注意することが必要となる。

データの中で着目した箇所とその解釈から概念を生成するのであるが、その時にデータだけをただ見ていけば何かが分かる訳ではなく、データをみていくときに自分の中に視点がないと関連がありそうな箇所にも気づくことができないのであり、オープン化をしっかりしておくことでその“視点”をたくさん持っておくことが非常に重要となる。ここでは、データとのいわば二人三脚とでもいうべき取り組みとなっていくのであるが、深い解釈という言葉の意味を理解するには、やはり、実際に、この方法を用いて、分析を行ってみるということが非常に重要となる。

そして、分析ワークシート作成の流れであるが、ワークシートに最初に記入するのはデータの着目箇所、となり、これをヴァリエーション欄に記入する。元のデータとの関係が必要に応じて後にたどれるように、発言者をアルファベット化するか番号を付けるなどして誰のデータからであるか識別できるようにしておく。関連性の高い部分について、下線、波線、網掛けなどを行うなどして、厳選することが重要である。このときに、文脈からそのことがわかるような具体例の取り上げ方が必要となってくる。

この検討の結果、採用することになった解釈を定義欄に記入していくこととなる。自分が解釈し

た意味を短文で記入するのであるが、このときの留意点は、分析テーマと分析焦点者に照らしてデータを解釈するのでいわば主語が想定されている形となるから、解釈内容は名詞的ではなく動詞的に考えることが大切になる。

それ以外に重要なものは理論的メモ欄に記入することとなる。解釈の思考プロセスをもっともよく記録したものがこの欄の内容になる。たとえば、定義とはならなかった他の解釈や解釈の際に浮かんだ疑問、アイデアなどを記入していく。

そして、定義を凝縮表現した言葉を概念欄に記入することとなる。概念欄に入るのは、単語かそれに近い程度の短い表現である。どういった言葉がもっとも相応しいものかを、かなり慎重に考えていく作業となる。類似例は、ヴァリエーション欄へ、対極例は、理論的メモ欄に記入する。

この作業を経て、概念の完成について近づいていくこととなる。分析はベース・データを対象にしてきているので、果たしてそれで十分なのか、それとも追加データの収集に移行すべきかの判断。データの方法論的限定が明確に行われた上で、10ケース以上のデータがあれば、まずは、ベース・データだけでの分析から結果をまとめることはできる可能性について述べられている。そして、分析焦点者の絞り込みをするかどうかの判断を行う。

この後、カテゴリーの生成へと進んでいく。個々の概念について他の概念との関係をひとつずつ検討して、ひとつの概念を基点にそれと関係のあるもうひとつの概念を見出していく作業を繰り返す。作業は、概念と概念とを図にしていくこととなる。

必要な概念数の目安は、10個程度の概念を創ったら、すでに概念相互の関係が何らかの形で見え始めているべきであることが挙げられており、10個程度を最初のチェックポイントとし、最終的な分析結果までに20個程度の概念と考えることが挙げられている。

これらの過程は、解説された書物（木下:1999、2003、2007）を読むと、読みやすさを感じてしまうのだが、いざM-GTAを用いて実際に取りくんでいくと、筆者のような初学者にとっては、かなり難しいことであることを身を以て理解しているところである。

おわりに

本稿では、近年のGTAやM-GTAを用いたソーシャルワーク領域の先行研究のレビューを行った。さらに、木下の著書（木下：1999、2003、2007）をもとに要約しながら、M-GTAについて整理した。要約という形をとりながら進めていったことについては筆者の力量のなさを露呈させるものであるし、もちろん、そもそも数冊の本として刊行されている内容である。当然ながら、それらの熟読等を通じて方法として身につけていかなければならない。しかし、あえて本稿でそこにトライしたのは、M-GTA への注目度が高まる一方で、M-GTAへの理解は、筆者・協力者ばかりでなく、その結果を広く受け取る、いわゆる応用する人間も重要であり、M-GTAによる研究結果を受け取る、読み手・受け手としての筆者自身として、M-GTAの特徴を理解していかなければ貴重な研究結果を理解することは難しいのではないかという関心からであった。

本稿では、分析を開始するところまでの整理であった。そこで、今後は、分析を開始してから、結果図を含めた結果までの整理を試みていくこととしたい。また、本文中でも触れているように、面接型調査に関する考察も行っていくこととしたい。

ただ、筆者自身が重視していることは、方法論としての技法を習得することだけではない。その礎となるいわば哲学的な理解があってこそ、方法論はいきいきと生かされてくるし、その研究によって導き出された結果は実践にとっても有用なものとなるのではないだろうかと考えている。

それらも含めて、これからも、実践現場におけるソーシャルワークの日々の営為への畏敬の念と誠実さとをもって、研究活動に精励していくこととしたい。

【文　献】

Barney G. Glaser and Anselm L. Strauss（1965）*AWARNESS OF DYING.*（＝1988. 木下康仁訳『死のアウェアネス理論と看護－死の認識と終末期ケア』医学書院）

Barney G. Glaser and Anselm L. Strauss（1967）*The Discovery of Grounded Theory*.（＝1996. 後藤隆・大出春江・水野節夫訳『データ対話型の理論』新曜社）

藤田徹（2009）『エスノメソドロジー的相互作用分析を用いた高齢者介護施設における介護実践に関する研究』、財団法人倶進会2008年度特別助成研究報告書。

深谷美枝・大瀧敦子（1995a）「実践から理論を導き出すために（１）―グラウンデッド･セオリーによるソーシャルワーク研究の可能性―」21（１）、39-43。

深谷美枝・大瀧敦子（1995b）「実践から理論を導き出すために（２）―グラウンデッド・セオリーによるソーシャルワーク研究の可能性―」21（２）、54－58。

林葉子（2008）「方法論としてのグラウンデッド･セオリー・アプローチ--分析方法に関する一考察-M-GTAを中心に」『Sociology today』58、56-63。

石山貴章（2010）『知的障害者の就労に関する雇用者の問題意識の構造』風間書房。

Kathy Charmaz（2006）*Constructing Grounded Theory A Practical Guide Through Qualitative Analysis*（=2008. 抱井尚子・末田清子監訳『グラウンデッド・セオリーの構築』ナカニシヤ出版）

萱間真美（1999）「精神分裂病患者に対する訪問ケアに用いられる熟練看護職の看護技術 保健婦、訪問看護婦のケア実践の分析」『看護研究』32（１）、53-76。

木下康仁（1990）「Grounded Theoryの理解のために」『看護研究』23（３）、2-19。

木下康仁（1999）『グラウンデッド・セオリー・アプローチ―質的実証研究の再生』弘文堂。

木下康仁（2003）『修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践【質的研究への誘い】』弘文堂。

木下康仁（2005a）『分野別実践編グラウンデッド･セオリー・アプローチ』弘文堂。

木下康仁（2005b）「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）について聴く」『看護研究』38（５）、3-21。

木下康仁（2007）『ライブ講義M-GTA　実践的質的研究法　修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂。

眞砂照美（2010）「てんかん相談におけるワーカー･クライエントの双方向エンパワメントプロセス―てんかんケアにおける医療ソーシャルワーカーの役割期待―」、九州保健福祉大学大学院社会福祉学研究科博士論文。

南彩子（1996）「ソーシャルワークへのGrounded Theoryの適用について」『天理大学学報』181、79-90。

三毛美代子（2002）「ソーシャルワーク調査方法としてのグラウンデッド・セオリー・アプローチ」『ソーシャルワーク研究』27（４）、18-27。

三毛美予子（2003）『生活再生に向けての支援と支援インフラ開発　グラウンデッド･セオリー･アプローチに基づく退院援助モデル化の試み』相川書房。

三毛美代子（2009）「社会福祉実践を支える事例研究の方法―これまでの研究成果から考えること―」、『社会福祉研究』104、76-87。

村杜卓（2005）『ソーシャルワーク実践の相互変容関係過程の研究』川島書店。

長崎和則（2010）『精神障害者へのソーシャルサポート』ミネルヴァ書房。

大瀧敦子（1995）「退院援助過程に関する実践現場からの理論化」『日本社会福祉実践理論学会研究紀要』３、24-34。

坂本智代枝（2008）「エビデンス・ベースド・ソーシャルワークの特質〔３〕―修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた質的研究の試み」『ソーシャルワーク研究』34（１）、47-

55。
戈木クレイグヒル滋子（2005）『質的研究方法ゼミナール　グラウンデッド･セオリー･アプローチを学ぶ』、医学書院。
住友雄資（2007）『精神保健福祉士のための地域生活支援活動モデル　対人援助職の成長プロセス』金剛出版。
髙木健志（2010）「質的調査方法を用いたソーシャルワーク研究に関する一考察」『山口県立大学社会福祉学部紀要』16、71-80。
得津慎子（2010）「知的障害者家族にみる日常生活を維持する力：M-GTAによるプロセス研究」『関西福祉科学大学紀要』13、19-35。
都築千景（2004）「援助の必要性を見極める－乳幼児検診で熟練保健師が用いた看護技術」『日本看護科学学会誌』24、３－11。
山野則子（2010）『子ども虐待を防ぐ市町村ネットワークとソーシャルワーク　グラウンデッド・セオリー・アプローチによるマネージメント実践理論の構築』明石書店。
横山登志子（2004）「ソーシャルワークにおける「ナラティブアプローチ」を巡る議論について」『北海道医療福祉大学看護福祉学部紀要』11、19-25。
横山登志子（2006）『ソーシャルワーク感覚』弘文堂。

Consideration of Social Work Research Methodology for Qualitative Data (1).

Takeshi TAKAKI

Recently, in a study in social work, analytical techniques have been used for a variety of techniques and research. This is the challenge of overcoming the gap between theory and practice in social work for the deepening of social work, and say that's tied going into a steady practice and research as inseparable and there is no sort of Will.

Then, it arranged it in this text while summarizing M-GTA by which the author was having interest based on the book (Kinoshita: 1999,2003,2007). In addition, the review in the Social Work area where GTA, M-GTA concerning the area of the Psychiatric Social Work Research.

Then, it reported on them as a research note in this paper.

Key Wards Qualitative Date, Modified Grounded Theory Approach, Social Work Research